

的を見いだすことができない。また、中国共産党に対する関係も一定の距離をおいた対応である。ソ連軍の東北での施設撤去のやり方は謎が多いと言わなければならない。今後別の角度からの研究が待たれる問題でもある。

最後に、やや技術的な面での記述に疑問がある。鋼管原料のスケルプは鍛接鋼管用の原料（帯鋼又は平鋼）であり、「丸鋼圧延機がスケルプ生産専用機ではなかったこと……」（248頁）というのをおかしいのではないか。また、低珪素鉄が製造できるようになって、予備精錬炉を必要としなくなったという趣旨であるならば、「予備精錬炉の活用については、これを低珪素鉄の製造に利用できるか……」（239頁）「49年には予備精錬炉による低珪素鉄の製造」（240頁）という記述は、やや混乱しているのではないだろうか。低珪素鉄の製造に成功したというが、254～55頁注（4）にもあるように、戦前水準からみても、0.9%を実現するのに四苦八苦しているのであるから、予備精錬をやめたことが果たして正しいのかどうかも技術的には検討が必要ではないだろうか。

（名古屋大学出版会、2000年7月、374頁、5,800円）

矢後和彦著

『フランスにおける公的金融と大衆貯蓄—預金供託金庫と貯蓄金庫 1816-1944—』

中 川 洋一郎

本書は、著者が、フランス留学を含めて約10年間にわたる研鑽の成果としてまとめたもので、19世紀初めから第二次世界大戦前にいたるフランスの大衆貯蓄の動向を、とりわけフランス政府による大衆資金の活用政策を、預金供託金庫・貯蓄金庫を中心に検討したものである。日本のフランス現代金融史研究において、著者の恩師ともいべき権上康男氏の優れたモノグラフィーに引き続き、矢後氏の新たな業績が加わったことは誠に喜ばしいことである。

まず、本書の編別構成に従って内容を紹介していく。

序 章「問題の所在—フランス経済史における国家と社会—」

この序章では、「両大戦間期から第二次大戦期ま

での預金供託金庫の経営動向に焦点をあてて、フランスにおける《公的金融》と《大衆貯蓄》の関係を明らかにする」のが本書の目的であると述べたうえで、著者は、「20世紀のフランスが直面した危機に対して、諸勢力が編み出した構想の、そのさらに周縁に位置していた《条件》に着目する。……この《条件》とのかかわりで、システムとしての《国家》のありようを、その直接の担い手である官僚に焦点をあてながらあきらかにする」と述べて、本書の課題が大衆貯蓄を媒介にしてシステムとしての国家のありようそのものを明らかにすることであると宣言する。

第 I 章「第一次大戦前の預金供託金庫と貯蓄金庫—予備的考察—」

この章では、預金供託金庫および貯蓄金庫が創設された19世紀初めから第一次大戦までの両金庫の経営動向が、非常に手際よくまとめられている。ここでは預金供託金庫の主要な任務として大衆貯蓄を長期国債への投資に振り向けることが確認される。

第 II 章「通貨・財政危機と公的金融の動揺—第一次大戦後の預金供託金庫と貯蓄金庫—」

この章では、第一次大戦後から1928年頃の通貨安定期までの両金庫の経営動向が検討される。第一次大戦直後のこの時期は、物価も為替も大きく変動したが、預金供託金庫は、戦争遂行のために生じた膨大な浮動債をコンソル化し、戦後の新しい秩序形成に貢献する。ただし、同金庫は長期国債に重点的に投資するという19世紀以来の資金運用方法を少し変更し、収益性と流動性を確保するために短期債への投資を増やしていった。

第 III 章「大衆貯蓄の前進と公的金融の拡大—通貨安定期の預金供託金庫と貯蓄金庫—」

ここで著者のいう「通貨安定期」とは、1928年半ばから1931年初頭を指している。預金供託金庫は1930年以降、社会保険基金を管理するようになったうえに、貯蓄金庫の預金金利を高水準に維持することで大量の預金を吸収した。一方では、その運用先を、国債だけでなく株式・社債、さらには国際業務へと拡大していった。これは、著者によると、「大衆貯蓄を資金の循環回路をして温存しつつ、預金供託金庫が公的金融を主導する」という総裁タヌリーの経営路線であった。

第 IV 章「財政・金融政策の再編と公的金融—大恐慌期の預金供託金庫と貯蓄金庫—」

フランスにおいて恐慌が深刻化した1930年代前半

には、預金供託金庫は「通貨安定期」に採用していた積極的な路線を放棄するが、30年代後半になるとタヌリーから代わったドロワ総裁のもとで国策への協力のために資金運用の拡大路線をとる。本書全体の約3割を占めるこの章において、この間の事情が非常に詳しく検討されている。

第V章「戦時体制下の公的金融と大衆貯蓄—第二次大戦期の預金供託金庫と貯蓄金庫—」

終章「総括と展望」

第V章で戦時体制下の両金庫を短く検討した後、終章で、著者は、大衆貯蓄と官僚制が「預金供託金庫という場においてさまざまな形であいまみえた姿」と「最終的には官僚の側が公的金融をコーディネートしてゆく」歴史を示すのが目的であったと締め括っている。

以下、本書を読んだうえでの読後感をまとめてみたい。

両大戦間期におけるフランスの貯蓄を対象とする本格的な研究として類書がない状況なので、本書は貴重な貢献である。矢後氏の研究によって、フランスの大衆貯蓄が政府のイニシアティブのもと資金循環回路にとり込まれた経緯が詳細に明らかになった。これは、第一次大戦以降に試みられたフランス国家による「信用組織化」の実態の一断面でもある。こんにち日本において郵便貯金の民営化が焦眉の課題になっているが、本書は、たんなる外国の歴史研究という枠を越えて、大衆貯蓄のあり方という現代的な課題を検討する上で有益な事例を提供している。

主に依拠した史料は預金供託金庫の監査委員会議事録であり、そこでの議論を執拗に追跡し、詳細に紹介している。著者が細部にこだわったのは、決定論的な叙述を避けて、「場」、「関係」あるいは「条件」を描き出そうとしたからだと自身で述べている(8頁)。この試みは、豊富な引用によって本書の中で繰り返し行われていて、《歴史研究》の一つの型を示している。この点、著者が長時間の作業の結果、膨大なノートを取り、それを丹念にまとめた手腕を評価したい。ただ、評者には、全体的に平板な印象を受け、少し冗漫で退屈な部分があるように感じたが、これもかかる叙述スタイルからすると、いたしかたないのであろう。

本書において著者がめざす《歴史研究》のスタイルが禁欲的に守られているが、それだけに評者などにはいささか不満も感じた。それは、フランスの官僚たちを動かしている国威発揚という観念の存在を

著者が《歴史研究》として認識しようとはしないことである。もともとは中規模の国家にすぎないフランスが、今日まで《大国》として押し出してきた理由の一端は、高級官僚が体現する国威発揚の強固な意志を抜きにしては語れない。官僚たちは国威発揚という観点から国民の貯蓄の活用を行っていたのだから、フランスの「公的」金融を扱うのなら、その官僚たちが抱いていた強烈な国家意思を看過してはありえないのではないか。

矢後氏からはとうぜん「国威発揚を目的とするなどとは監査委員会議事録に書いていない。書かれていないことを材料にするのは歴史研究ではない」と反論を受けるかもしれない。どこか片田舎にある一民間機関の歴史であるならば、それも許されよう。しかし、当該の金融機関は、フランスの大衆貯蓄を全国的規模で広範に収集し、しかも、理事会を構成していたのはフランス官僚機構の頂点に限りなく近いエリート中のエリートたちである。公的金融を扱いながら、最も肝心な国家の意思、フランスにおける国粋主義、ショーヴィニズム、国家の経営に携わる人々を突き動かしている動機について看過しているようにみえる。書かれていないことでも肝心なことは扱わざるをえない。そういえば、「本当のことは目に見えない」と狐も星の王子様に語っていた。「本当のことは書かれない」と、私なら言うかもしれない。

とはいえ、研究方法として、ある一つの金融機関を取り上げて、その経営動向を核として検討し、周辺の課題を考察するという手法が採用されており、本書は本格的なモノグラフィーとして非常に手堅い研究であることは間違いない。対象が限定されているだけにまとめやすいという好条件はあったといえるが、まずは良いテーマを選んだ先見の明をたたえたい。先行研究としては、権上康男氏のインドシナ銀行・フランス銀行の事例があり、著者は研究スタイルの上でも権上銀行史学の後継者と見ることができよう。

(東京大学出版会、1999年7月、355頁、8,000円)